

神の名

聖書でイスラエルの神は様々な名前では呼ばれている。神を意味する最も一般的な普通名詞は「エロヒーム」である。イスラエルの神を指すときは通常、「神」と単数で訳され、それ以外の民族の神を指す場合は「神々」と複数形で訳されることが多い。「エロヒーム」はセム系言語で神にあたる「エル」と関係する。この「エル」は他の言葉と組み合わされて、①「エル・エルヨン」（いと高き神）、②「エル・ロイ」（わたしを顧みられる神）、③「エル・シャッドアイ」（全能の神）、④「エル・オーラム」（永遠の神）、⑤「イスラエル」（神と闘う）、⑥「エル・エロヘ・イスラエル」（神はイスラエルの神）、⑦「エル・ベリト」（契約の神＝バアル・ベリト〈契約の主〉）、などがある。

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数: 9 / 聖句等の総数 33250 (永遠の神)1個]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) [検索語彙: 永遠の神]
K 創世記	14:18 <u>いと高き神</u> の祭司であったサレムの王メルキゼデクも、パンとぶどう酒を持って来た。	
K 創世記	16:13 ハガルは自分に語りかけた主の御名を呼んで、「あなたこそ <u>エル・ロイ(わたしを顧みられる神)</u> です」と言った。それは、彼女が、「神がわたしを顧みられた後もなお、わたしはここで見続けていたではないか」と言ったからである。	
K 創世記	17:1 アブラムが九十九歳になったとき、主はアブラムに現れて言われた。「わたしは <u>全能の神</u> である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。	
K 創世記	21:33 アブラハムは、ベエル・シェバに一本のぎよりゆうの木を植え、 <u>永遠の神</u> 、主の御名を呼んだ。	
K 創世記	32:29 その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからは <u>イスラエル</u> と呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」	
K 創世記	33:20 そこに祭壇を建てて、それを <u>エル・エロヘ・イスラエル</u> と呼んだ。	
K 創世記	35:7 そこに祭壇を築いて、その場所を <u>エル・ベテル</u> と名付けた。兄を避けて逃げて行ったとき、神がそこでヤコブに現れたからである。	
K 士師記	8:33 ギデオンが死ぬと、イスラエルの人々はまたもバアルに従って姦淫し、 <u>バアル・ベリト</u> を自分たちの神とした。	
K 士師記	9:46 ミグダル・シケムの首長は皆これを知り、 <u>エル・ベリト</u> の神殿の地下壕に入った。	

神にあたる最も重要な言葉は「ヤーウェ」「ヤハウエ」(YHWH)である。神の名は、モーセに燃える柴のところで啓示されたとき(出エジプト記 3:1~15)、ヘブライ語では、「Y・H・W・H」にあたる四つの子音文字(ユダヤ教聖書、つまり旧約聖書が書かれたヘブライ語には、母音記号はない)で書かれる。

「ヤーウェ」「ヤハウエ」と発音されると考えられているが、正確な発音は分かっていない。ユダヤ人はその名を神聖なものと考え、大贖罪日のような特別な機会(→大祭司のみが幕屋の至聖所で神の名を称えることが許されていた)を除いて、その名を口にしなかったからである。この神の名にあたる部分を声にするときは、「Y・H・W・H」を「アドナイ」(私の主)と呼んだと思われる。

BC 3世紀から2世紀にかけて、旧約聖書がギリシア語に翻訳されたとき、この聖なる名は音訳されなかった。その代わりに「アドナイ」に代わる「キュリオス(主)」が使われ、日本の聖書でも「主」という言葉で代用されているが、以上のことから「主」は「ヤーウェ」「ヤハウエ」の直接の翻訳語ではない。また、聖書に多く登場する「万軍の主」(サムエル記上 1:3 他、247 聖句に登場する)は名前ではなく、呼称である。